

特別講演 2

赤ちゃんの“なめる”を脳から考えてみよう

元愛知県心身障害者コロニー中央病院

歯科部長 石黒 光先生



自然界の動植物は、情報の入力からシステムが機能（出力）する仕組みになっています。出力から始まる生命システムは存在しません。ヒト脳における情報処理に関しても例外なく、ほとんどの情報は「感覚入力から始まる」と考えられます。つまり情報が「感覚器官—脳—神経—筋肉—臓器」として伝えられ身体が機能します。食行動も同じシステムです。このような機能の発達過程については、近年の脳科学の進展により、胎児期から乳幼児期の脳機能についても明らかになりつつあります。

最近、歯科でも0歳児からの口腔の機能や形態が語られる様になってきましたが、「くち」を入力した「感覚器」としてとらえる視点は少ない様です。

新生児期からの感覚で、最も早く発達するのは触覚で、口唇、舌、指や手掌などです。抱っこなどの他覚的な触覚入力に対し、赤ちゃん自身が哺乳以外に



自発的に行う口への触覚刺激として、指を口唇に触れたり吸ったり、舌を様々に動かしてなめる行為を頻繁に行います。それは哺乳の際の舌の単純な

蠕動運動とは、まったく異なった動きです。指なめで指先がその刺激を受け、口唇や舌、粘膜などから脳に感覚情報を伝えます。手でおもちゃなどをつかめる様になると、なめまわし、その大きさ、硬さ、質感を舌の出し入れ、前後左右に動かし入力します。この行為が、その後の食べる機能のトレーニングになります。さらに、なめている間の呼吸は、鼻で呼吸します。

一方、感覚情報だけでなく、様々な物をなめることで雑菌も口腔に“入力”され、その後の免疫機能の獲得に大きく関与します。しかし、近年、乳児の育児中のママの「衛生意識」の高さは、コロナ禍でより顕著になっています。赤ちゃんが触れる全ての物を、無菌状態にし、口に触れさせない、なめさせない、手づかみで食べさせないなどの状況が日常化しつつあります。

このような様相は、子どもの発達に影響を及ぼすと予測されます。今回、新生児期から乳児期の口の感覚器としての役割を、とくに「なめる」行為を通してみなさんと考えてみたいと思います。



主な著書 「重症児の療育指針」共著 医歯薬出版
「障害児への架橋」共著 医学書院
「障害者歯科ガイドブック」共著 医歯薬出版
「病弱・虚弱児の医療・療育・教育」共著 金芳堂
「小児・障害児（者）のための在宅医療マニュアル」共著 金芳堂
「乳幼児の発達医療と生育支援」共著 南山堂

略歴 1973年 愛知学院大学歯学部卒
1979～2015年 愛知県心身障害者コロニー中央病院 歯科勤務
2016年～ 重症児デイサービスひろがり 嘱託歯科医
朝日大学非常勤講師、名古屋女子大学非常勤講師
名古屋医健スポーツ専門学校、ナゴノ歯科衛生専門学校非常勤講師
(日本障害者歯科学会 指導医 名誉会員)